

令和 4 年 9 月 15 日現在

機関番号：37302

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16H03514

研究課題名(和文) 覚醒する禁教期キリシタン文化

研究課題名(英文) Kirishitan Culture during the Ban on Christianity in Japan

研究代表者

浅野 ひとみ (ASANO, HITOMI)

長崎純心大学・人文学部・教授

研究者番号：20331035

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：国内に残るキリシタン信仰具(伝世品と発掘品)は、250年に及ぶ禁教という特殊な状況下で、史資料が乏しく、制作地、年代が不祥な場合が多い。特に、小さなメダルは、鋳直された物が多く、伝世品は、高札撤去後の再宣教期にパリ外国宣教会によってもたらされた物が混在する。本研究では、1588年に沈没したジローナ号からの採取品、発掘品であるクリプタ・バルビ博物館(ローマ)所蔵品、保存状態の良いバチカン図書館所蔵品を基準作として、美術史・文化財科学・考古学の学際研究を行い、国内作例の位置づけを試みた。コロナ禍により最後の2年は調査が行えなかったが、文献資料の読み直しにより信仰具の実態に近づくことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

キリシタン信仰具は大きく分けて発掘品と伝世品がある。前者は、発見された場所からおおよその年代や来歴がわかるものの、伝世品は禁教期に史資料が散逸したため、不明な点が多い。個人所有、または博物館等に収蔵されている作例の中には明らかに大正期以降の土産品、レプリカ、高札撤去後にパリ外国宣教会が持ち込んだ物、そして贗作が同居している状況である。そのような物を所有者は真贋を問わず、大切に持ち伝えているので、部外者は触れることさえ許されないものがある。制約が多い中で、沈んだ年が明確な沈船からの採集品は、基準作として非常に貴重である。コロナで阻まれたが、今後もそのような海外の作例を積極的に調査していきたい。

研究成果の概要(英文)： The "Kirishitan" devotional artifacts, consisting of handed-down and excavated items remaining in Japan are often opaque in terms of production area and dates because of the lack of documents during the 250-year ban on Christianity. Many medals may have been recast, and the handed-down objects are a mixture of those brought by the Mission Etrangères de Paris during the re-mission period. In this study, we conducted interdisciplinary research of art history, cultural property science, and archaeology based on the devotional medals extracted from the Girona that sank in 1588, the excavated collection of the Crypta Balbi Museum (Rome) and the well-preserved collection of the Vatican Library; we attempted to re-establish the function and meaning of the domestic devotional artifacts. Although the field survey could not be conducted for the last two years owing to the pandemic, it was possible to reveal various new aspects of the devotional objects by rereading historical documents.

研究分野：西洋美術史

キーワード：信仰具 メダル ブラケット スペイン艦隊 キリシタン ベルファスト ローマ 津久見

## 1. 研究開始当初の背景

キリシタン資料のうち、十字架やメダル、コンタツ(ロザリオ)といった信仰具に関しては、宗教学、文献学、図像学、民俗学分野の研究が主流であった(西村 1958、五野井 2004 他)。しかし、このような伝世資料の非破壊調査から得られる情報には限界があり、禁教期のキリシタン遺物に関する研究は推論の域を出なかった。ところが、道路拡張事業によって発掘が行われた大友宗麟の居所であった府内(大分市、「中世大友府内町跡」)で次々とキリシタン遺物の発掘品が世に出ると、島津侵攻(1587)以前のキリシタン城下の様子があらわになった(豊後府内 2006)。中でも注目すべきは、いわゆる「ヴェロニカのメダイ(メダル)」および「府内型メダイ」である(浅野、後藤 2009)。前者は、聖遺物のキリストの真顔と聖母子半身像を両面にかたどったメダルであるが、同形のものはヨーロッパでは現在のところ見出せず、ローマ巡礼のみやげであるバッジをもとにして日本で作られたものと考えられる(浅野 2013)。後者は、純鉛製の装飾の無いメダルであるが、片面の中央がくぼんでおり、聖遺物を置いてガラスなどをはめていた可能性がある。鈕には細い穴が貫通しており、糸などを通して首から提げていたものと思われる。この府内型メダイは鉛同位体比分析の結果、これまで知られていた華南・華北産の鉛ではないことが確認された(平尾 2013)。2010年、平尾のタイ調査時にそれまで N 領域としか認識されていなかった鉛の産地が特定され、その後の研究は大きく飛躍した。その時の調査では、鉛インゴットの鋳型が発見され、その形状は、府内、町屋、平戸で確認されていた円錐形のインゴットのものであることが判明した(Hirao, Goto, Asano et al. 2013)。現在は、国内外で同形の鉛インゴットが確認されており、いずれもソントー鉱山のものであることが判明している。これらの鉛は、実際のところ、府内、岡豊城、万才町(長崎市)等で出土した火縄銃の玉を作るために輸入されたものと思われ、同位体比分析の結果はそれを裏付けた。同じ鉛から信仰具と武器が同時に作られていたことになる。2008年、平尾、浅野、後藤他は、国立カタルーニャ美術館(バルセロナ)の古銭部において、ヨーロッパのメダル約 1000 点を対象に目視調査を行い、その中の数点について、帰国後、鉛同位体比測定を実施した。その結果、ヨーロッパにおける鉛の産地は、ソントーとはまったく異なることが判明した(Ro, Hirao, Asano et Goto 2012)。その後、これらのデータが、島原の乱(1638年)で絶命した信徒の所有していたメダルと一致することがわかり、これまで美術史的にはヨーロッパ製と目されていた原城跡出土メダルが実証的見地より証明された(魯、平尾 2010)。2015年に行われたシンポジウム(大分県立歴史博物館)では、美術史、考古学、史学、キリシタン墓の研究者が討議を行い、およそ 200 名の参加者を得、大分の方の郷土史への関心の深さが伺われた。その際、各分野で、布教期から禁教下でのキリシタン文化の変質を実証し得る可能性が示唆された。すなわち、従前の研究では、禁教期には、布教最初期のイエズス会宣教活動が潜伏キリシタンによって細々と維持されたのみと考えられてきた。しかしながら、近年のキリシタン墓の類型調査(大石 2012)、メダルの科学的分析の結果は、明らかに海禁下にもかかわらず、なんらかのルートでカトリック改革後の同時代的ヨーロッパ文化が日本に伝わっていた可能性を示唆している(浅野 2014)。それは、1590年の天正少年使節の帰国に伴う印刷技術の導入、禁教期前後の托鉢修道会の足跡(Asano, Takeda et al. 2012)、金属を中心とした武器流入路の変化(平尾 2014)とも矛盾しない。

## 2. 研究の目的

キリシタン遺物は、禁教期を経て、長いこと、不可触の分野であったため、国内に残存する史資料は非常に少ない。その中で、メダルやプラケットなど金属製の信仰具は耐久性があるためわずかながら残存している。それらは、大きく伝世品と発掘品とに分かれる。発見された地層からおおよその年代がわかる考古学的資料は貴重だが、土中に長期間埋まっていると劣化が激しく、図像も明白には読み取れない。一方、伝世品の中には、近代になってから土産品として作られたものも混在し、キリシタン遺物研究は、まず、対象作例の真贋を極めることが肝要である。蛍光エックス線による調査は、制作年代による金属成分の比率の差異に着目し、編年を試みる一助となる。さらに、沈没した年がはっきりしている沈船から採取された信仰具を対象にすることにより、信仰具の制作年代の下限を知ることができるため、貴重な基準作となると考えられる。さらに、美術史の分野では、様々な美術作品に用いられた版画を特定することで、やはり編年を探ることができるのではないかと考え、ヨーロッパ版画の調査をフランス国立図書館他で行い、図像源泉を明らかにする。

各地での調査サンプル数を増やすことによって、国内作例調査の成果をより確かなものとする。

### 3. 研究の方法

初年度は、浅野（代表：美術史）、後藤（分担：考古学）、稗田（分担：保存科学）、平尾（連携：保存科学）でメダルの実地調査を行う。成果は、日本考古学会、美術史学会などで発表し、論文をまとめる。大石（協力：キリシタン墓）は崎津・大江の悉皆調査の下準備を現地で行う。浅野は、さらに、初期洋風画の屏風および図像資料の実地調査を国内の美術館等で行い、版画と文献調査を海外の図書館で行う。次年度以降は、ジローナ号のメダル（ベルファスト）、東京国立博物館の金属製信仰具等の蛍光エックス線調査を行い、平成31年度の国際シンポジウム（大分県）で成果の一部を公表し、最終年は論文集を刊行する。グループ全体の役割分担は、浅野（代表）が全体を統括し、おもに美術史分野に関しての調査研究を行う。また、分担研究者の後藤は考古学、同じく稗田は理化学的調査を連携研究者の平尾とともに行う。大石は研究協力者として、キリシタン墓の調査を行う。年末に全体討議会を大分で行い、その後、めいめいが関連する学会で成果を発表する。

<2016年度> ヴァチカン図書館には、歴代教皇のメダルがあることが知られているが（Venuti 1744, Modesti 2002）、公開されている画像は少ない。例えば、パウルス II 世メダルのようにヴェロニカを片面に表したものが幾つかあり、それらと府内作例との比較により、図像源泉を探ることが可能となる。夏季に1週間かけて、浅野、後藤、平尾、稗田により、ヴァチカン図書館所蔵のメダルの写真撮影、できれば、蛍光エックス線分析により、金属組成の調査を行う。また、大石は、「伏碑」形式のキリシタン墓が、1600年頃に突如出現する理由を追及しており、当該年は、未調査の南天草のキリシタン墓の悉皆調査を行う。さらに、浅野は、先行研究（坂本 1973）によって一部が明らかにされている《読書する修道士のいる西洋風俗図》（津久見市所蔵）《泰西風俗図屏風》などの図像源泉を探るべく、フランス国立図書館とウォーバーク研究所（ロンドン）、大英図書館等で16-17世紀の版画及び文献調査を夏季、春季に2週間ずつ行う。年末には、互いの研究成果の進捗度を大分で確認し合い、討論を行い、各自の専門分野の学会で口頭発表し、年度末までに論文の形にして投稿する。

<2017年度以降> 1570年頃、教皇ピウス五世は、「キリストとマリアのメダルを首にかけている者、また、心をこめて見つめる者、前に掲げて祈りを捧げる者に贖宥を受ける」と勅書を発布したため、善男善女がこぞって買い求めて首から提げたという事実とも一致する（De Fuenmayor 1595）。こうした贖宥付メダルは爆発的に売れ、その資金がレバントの海戦の準備金となったと考えられる。その一部が宣教師により遠く、日本にももたらされたと考えられる。ベルファスト（北アイルランド）のアルスター博物館には、1588年に沈没したスペイン船、ジローナ号から発見された信仰具が所蔵されている。これに関して、浅野はすでに先方の学芸員とコンタクトを取っており、情報も得ている。「キリストとマリア」を表裏に表したメダルを始めとして興味深いコレクションは、まさに、図様が日本の伝世資料と一致する。メダルは、ほとんどのケースにおいて、図像からの編年は非常に困難である。わずかに、表された聖人の列聖年から制作年が推定されるのみである。しかしながら、それも、ある聖人を列聖する前から、キャンペーンのようにして列聖像が出回っていたため、制作年を決定づけることはできない。また、たとえ、ローマの聖年などの記念すべき年号が記されていても、後年再発行された場合もあり、やはり決定的ではない。そのような意味において、年代のはっきりしているベルファストの事例は、基準作となり得る非常に貴重な例なのである。平成29年度は、浅野、後藤、稗田、平尾がベルファストに赴いて、アルスター博物館所蔵品を実見し、写真撮影、蛍光エックス線分析を1週間の予定で行う。当該年度から連携研究者として参加する大石は、国内でキリシタン墓と関連する伏碑の墓、碑文のある墓の調査を行う。年末に大分で全体の討論会を開催し、情報交換と翌年度の指針を話し合う。また、全員で手分けして、ウェブ発信、大分県立歴史博物館等での歴史講座を担当する。さらに、各人の所属する学会で成果発表を行い、論文にする。2018年度には、浅野、後藤、稗田、平尾は東京国立博物館に所蔵されている金属製キリシタン遺物の蛍光エックス線調査を許可が得られたら行う。それらのうちほとんどは、キリシタンからの没収品であり、長崎奉行所から、明治期に帝室博物館へ移管されたものであり、踏絵として用いられたプラケット、銅板絵、メダル等を含む。これらは、伝世品ではあるが、記録が残る国内の資料として非常に貴重であり、金属の組成分析はこれまできちんとした形で発表されたことはない。金属作例の調査は今後、キリシタン遺物研究を進める上での必須項目である。本研究、3年目にこの課題を置いているのは、重要文化財等を含むため、調査許可を得るのに時間がかかるのを見越しているからである。後藤は二本木、福原のキリシタン遺物調査を行う。同年度も、全体討論会、各人の学会発表、論文提出、当事者のウェブでの情報公開、歴史講座を続ける。4年目には、2013年にマドリッドで開催された「南蛮漆器」展を監修したオビエド大学准教授 Yayoi Kawamura 氏（スペイン国籍）を招へいして、国際シンポジウムを大分県で開催する。浅野は、学術振興会の「外国人研究者招へい事業」ですでに2016年度に1か月の予定で同氏の招へい申請を出す。全体討論会、各人の学会発表、論文提出は例年の通り行う。当該研究、最終年には、論文集を刊行する。ここに挙げた調査対象は、

すでにコンタクトを取っている所蔵館のものを挙げているが、実際のところは、アジアや南米など、同時代のキリスト教信仰具は世界中に残存している。従って、何らかの理由で調査が許可されなかった場合は、対象を変えて行く。当該研究は、様々な分野の研究者がこれまで独自に行ってきた調査の結果、1600年前後の金属の転換期に一致して、キリシタン文化に変化が起きたことを実証しつつあり、学際研究はキリシタン文化を総合的にとらえる上で欠かせない。また、連携研究者の平尾は、鉛同位体比分析の第一人者であり、国内で同人ほど金属を知る人物は無く、当該研究には必須の人材である。また、大石も、これまで独自にキリシタン墓の研究を行ってきた結果、同様に1600年からの大きな変化を感じており、他の追隨を許さぬ実証的な手法は当該研究の礎となるだろう。

以上、当初の研究計画概要を述べたが、コロナ禍により中断、変更せざるを得なかった課題もあった。また、成果物のウェブへの掲載は、画像の所有権の問題があり、1点につき2万円近くかかる上に3年のみと年限を区切られる場合もあり、見送った。

<参考文献>坂本 1973：坂本満『日本の美術 80 初期洋風画』至文堂 浅野 2013：浅野ひとみ「布教期の金属製キリシタン信仰具」、平尾良光先生古稀記念論集刊行会編『文化財学へのいざない』平尾良光先生古稀記念論集刊行会 De Fuenmayor 1595：De Fuenmayor, Antonio：Vida y hechos de Pio V. Pontifice romano, dividida en seis libros, Madrid Venuti 1744:Venuti, R.:Numismata Romanorum Pontificum praestantiora da Martino V ad Benedictum XIV, Roma Modesti 2002：Modesti, Adolfo, Corpus Numismatum praedantiae Romanorum Pontificum, 4 vols.,Roma, 2002-06

#### 4. 研究成果

2016年にベルファストとローマでの調査を理想的に10日間で終わらせることができたため非常に幸運であったが、残念ながら平尾は体調不良のために参加できなかった。このヨーロッパ調査に際しては、アルスター博物館、クリプタ・バルビ博物館、ヴァチカン図書館古銭部の方々、西南学院大学の山田順教授にご高配賜ったことをここに記して深謝する。

同年、日本学術振興会外国人研究者招へい事業により、オビエド大学からYayoi Kawamura氏を1か月にわたり招へいした折には、上智大学、東京藝術大学、東京国立博物館、国立民俗博物館、徳川美術館（愛知）、茨木市立キリシタン遺物史料館、同文化財資料館、南蛮文化館、京都国立博物館、大分県立歴史文化博物館、大分県立美術館、九州国立博物館、長崎純心大学、天草キリシタン史料館における南蛮漆工芸品など所蔵品の特別閲覧・調査、講演会開催のコーディネート、セティングに際して、多くの方のご協力を賜った。また、大分では後藤が中心となって国際シンポジウムを開催し、200名以上の聴衆を集めるなど、全国の研究者との学术交流、一般の方への情報発信に寄与した。

大浦天主堂キリシタン博物館の皆さんにも長時間にわたる調査にお付き合いくださったことを深く感謝する。さらに、東京国立博物館もちょうどコロナの流行する直前の1月末に2日間調査を許可してくださり、多くのことを学ぶ機会を得ることができたが、現在、国内数館に分散しているキリスト教関連遺品をすべて調べることはできず、成果をまとめられなかったのが心残りである。

その後、あらゆる調査ができなくなり、研究期間を1年間延期し、それでも、県外へ行けない状況が続いたため、浅野は、やむなく文献史料に基づいたキリシタン信仰具の機能について考察し、稗田は大分県内所蔵資料についての調査報告をまとめ、時折、オンラインで片多氏（当時、長崎県埋蔵文化財センター所属）も交え、研究討議を行った。

不自由で混迷・孤絶した時を過ごさざるを得なかったが、別のスキルを磨くよいチャンスとなった。さらに、県内で大石らによる、天正少年使節の一人である千々石ミゲルの墓所特定という大きな成果が得られ、わずかながら貢献できたのは望外の喜びであった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 浅野ひとみ	4. 巻 43
2. 論文標題 キリシタン遺物に見るイスパニア世界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 46-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木和博	4. 巻 53
2. 論文標題 国宝「慶長遣欧使節関係資料」における ロザリオの聖母 ブラケットの系譜と年代	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北学院大学文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 125-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅野ひとみ・石川優生・片多雅樹・後藤晃一	4. 巻 26
2. 論文標題 大浦天主堂キリシタン博物館所蔵「古賀・大江資料」研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 純心人文研究	6. 最初と最後の頁 23-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木和博	4. 巻 52
2. 論文標題 国宝「慶長遣欧使節関係資料」の聖遺物入れ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北学院大学文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅野ひとみ	4. 巻 0
2. 論文標題 出土ガラス製品に関する美術史的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 千々石ミゲル夫妻伊木力墓所発掘調査（第1次-第3次）報告書 分析・考察編	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hieda, Yuki; Asano, Hitomi	4. 巻 2017
2. 論文標題 Metal Composition Analysis of the 16th Century Christian Medals	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Proceeding of the Sixth Symposium of Society for Conservation of Cultural Heritage in East Asia-	6. 最初と最後の頁 489-493
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 後藤晃一	4. 巻 1
2. 論文標題 戦国から江戸初期の真鍮製品 -キリシタン資料と豊後府内出土遺物を中心に-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大分県立埋蔵文化センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平尾良光	4. 巻 1
2. 論文標題 北アイルランド沖に沈んだスペイン艦隊のジローナ号から得られたキリスト教メダルの鉛同位体比	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大分県立埋蔵文化センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 27-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稗田優生	4. 巻 I I
2. 論文標題 岡城銭座出土の銅製金属分析における蛍光X線分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岡藩城下町遺跡群発掘調査	6. 最初と最後の頁 39-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木和博	4. 巻 49
2. 論文標題 国宝「慶長遣欧使節関係資料」におけるブラケット残欠の基礎的考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東北学院大学東北文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 43-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hitomi Asano	4. 巻 23
2. 論文標題 A Study on Devotional Medals Excavated from the Spanish Armada Wrecks Preserved in the Ulster Museum	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Junshin Journal of Studies in Humanities	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Hitomi Asano
2. 発表標題 Sobre los restos del Galeon San Diego naufragado en 1600
3. 学会等名 Simposio Internacional. Japon y el mundo hispanico a traves de la ruta transpacifica: Siglos XVI y XVII (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅野ひとみ
2. 発表標題 キリシタン信仰具とイスパニア世界
3. 学会等名 スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅野ひとみ
2. 発表標題 ザビエルのもたらした信仰具
3. 学会等名 ReMo研月例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木和博
2. 発表標題 国宝・慶長遣欧使節関係資料の検証 -そのすべてが使節の将来品か-
3. 学会等名 一般社団法人 日本考古学協会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅野ひとみ
2. 発表標題 キリシタン信仰具研究の現在
3. 学会等名 ReMo研月例研究会
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 石川優生
2. 発表標題 初期洋風画 読書する修道士のいる西洋風俗画 (大分県津久見市所蔵)の彩色材料
3. 学会等名 日本文化財科学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 稗田優生・浅野ひとみ・後藤晃一・片多雅樹・大石一久・内島美奈子・島由希
2. 発表標題 大浦天主堂キリシタン博物館所蔵 金属製信仰具の蛍光X線分析 -古賀および大江資料の事例研究-
3. 学会等名 日本文化財科学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ISHIKAWA Yuki, ASANO Hitomi, GOTO Koichi, KATATA Masaki, OISHI Kazuhisa, UCHIJIMA Minako, SHIMA Yuki
2. 発表標題 Metal component of Kirishitan devotional objects
3. 学会等名 2019 International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稗田優生
2. 発表標題 パチカン図書館所蔵メダルの光学調査
3. 学会等名 れきはく交流展
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稗田優生、後藤晃一、浅野ひとみ
2. 発表標題 パチカン図書館所蔵のメダルの金属組成
3. 学会等名 日本文化財科学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稗田優生
2. 発表標題 ヨーロッパにおけるキリスト教メダルの化学組成
3. 学会等名 博物館歴史文化講座
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 浅野ひとみ
2. 発表標題 キリシタン時代の美術
3. 学会等名 長崎学講座
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稗田優生、後藤晃一
2. 発表標題 材質から考察するキリシタン・南蛮資料の流通と製作技術の変遷
3. 学会等名 日本文化財科学会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hieda, Yuki; Asano, Hitomi
2. 発表標題 Metallic Composition of European Religious Medals in the Sixteenth Century
3. 学会等名 第6回アジア文化遺産シンポジウム（上海）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 浅野ひとみ
2. 発表標題 続踏絵考
3. 学会等名 京都セルバンテス懇話会（長崎大村）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 浅野ひとみ
2. 発表標題 踏絵再考
3. 学会等名 西南学院大学国際文化学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 浅野ひとみ
2. 発表標題 外海地方（長崎）のキリスト教関連遺物
3. 学会等名 スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Hitomi Asano
2. 発表標題 A New Interpretation of Western-Style Paintings Found on Folding Screens
3. 学会等名 European Association of Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 後藤晃一
2. 発表標題 キリスト教王国を夢見た大友宗麟
3. 学会等名 下関東部の文化財を見直す会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 浅野ひとみ
2. 発表標題 対抗宗教改革期のキリスト教信仰具
3. 学会等名 国際シンポジウム 南蛮工芸 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 平尾良光
2. 発表標題 真鍮の歴史について
3. 学会等名 国際シンポジウム 南蛮工芸 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 後藤晃一
2. 発表標題 真鍮製キリシタン遺物
3. 学会等名 国際シンポジウム 南蛮工芸（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 浅野ひとみ編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 長崎純心大学	5. 総ページ数 190
3. 書名 覚醒する禁教期キリシタン文化	

1. 著者名 松川隆治、大石一久、小林義孝、長崎外海キリシタン研究会、浅野ひとみ他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 批評社	5. 総ページ数 284
3. 書名 天地始まりの聖地 長崎外海の潜伏・かくれキリシタンの世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2016年、浅野は、日本学術振興会外国人研究者招へい事業により、オビエド大学（スペイン）からYayoi Kawamura氏を1か月間に渡り招へいし、仙台市博物館、上智大学、東京藝術大学、東京国立博物館、国立民俗学博物館、徳川美術館（愛知）、茨木市立キリシタン遺物史料館、同文化財資料館、南蛮文化館、京都国立博物館、大分県立歴史文化博物館、大分県立美術館、九州国立博物館、長崎純心大学、天草キリシタン史料館において、南蛮漆工芸品など所蔵品の特別閲覧・調査をセッティングした他、シンポジウム、講演会を開催して、全国の研究者との学术交流に努めた。また、2021年度、浅野は、千々石ミゲル推定墓所発掘調査委員として研究討議に参加し、墓所確定に寄与した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	石川 優生  (Ishikawa Yuki)  (60636439)	大分県立歴史博物館・大分県立歴史博物館・学芸員   (87501)	2021.2 退職により補助事業者資格喪失、協力研究者へ。
研究 分 担 者	後藤 晃一  (Goto Koichi)  (00639247)	大分県立歴史博物館・大分県立歴史博物館・主幹研究員   (87501)	2017.4 異動により補助事業者資格喪失、協力研究者へ。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウム 南蛮工芸	開催年 2016年～2016年
-------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関